

2017 年度 国際ユース作文コンテスト受賞者

テ ー マ：「自然から学ぶ」

参加国数：155 カ国

応募総数： 合計 15,441 作品（子どもの部 4,938 作品、若者の部 10,503 作品）

文部科学大臣賞（最優秀賞）（各 1 点）

<子どもの部>

- 『自然から学ぶ』
ネダ・シミッチ
(ボスニア・ヘルツェゴビナ) 12 歳

<若者の部>

- 『マルベリー（桑の木）と私』
ネハ・ラワット（インド）22 歳

優秀賞（各 2 点）

<子どもの部>

- 『あつかい方ふるまい方を学ぶ』
レ・ホアン・マイ（ベトナム）13 歳
- 『あなたに届けたい 2 つの贈り物』
親泊 千明（沖縄県）14 歳

<若者の部>

- 『知識と本物』
海野 樹（東京都）16 歳
- 『本質を知る』
アナ・グリゴリャン（アルメニア）20 歳

入選（各 5 点）

<子どもの部>

- アーザーン・ワカス（パキスタン）9 歳
- 石川 咲希（大阪府）11 歳
- ジェシカ・アールンド
(ニュージーランド) 12 歳
- アヌシュカ・バンサル（インド）14 歳
- ウムルベク ツグゾルマ
(モンゴル国) 14 歳

<若者の部>

- 喜安 千香（神奈川県）16 歳
- ザーマン モハ ノエル
(バングラデシュ<埼玉県在住>) 17 歳
- アナンダパドゥマナバン・ビジャヤクマ
ール（インド）20 歳
- ジャーフアル・チェリヒ
(アルジェリア) 21 歳
- ツェワン・ヌル・シェルパ
(ネパール) 21 歳

佳作（各 25 点）

<子どもの部>

- イスマエル・アギレ・ポテロ
（コロンビア）8 歳
- フアン・パブロ・ラミレス・アルベラエス
（コロンビア）8 歳
- 小田 向日葵（福岡県）9 歳
- ライラ・フィオレッタ・レムス・コト
（エルサルバドル）9 歳
- 植木 涼太（埼玉県）9 歳
- 猫村 彩花（広島県）12 歳
- 森脇 秀行（広島県）12 歳
- 武内 優里香（東京都）12 歳
- ダッフア・ファフィッド・ユナンダ
（インドネシア）13 歳
- デニス・ログビノフ（ロシア）13 歳
- 星川 葉月（京都府）13 歳
- レア・カスッチ（イタリア）13 歳
- 山岡 真緒（茨城県）13 歳
- 山崎 凜太郎（長野県）13 歳
- ヨン・ミン・（ケイト・）リー
（韓国）13 歳
- アナミカ・ポイルル（モーリシャス）14 歳
- 鎌田 千尋（長野県）14 歳
- カルヤーニ・ジジス
（アラブ首長国連邦）14 歳
- 山口 美莉（東京都）14 歳
- ナタリア・ソランゲ・モンテネグロ・パ
ルマ（エクアドル）14 歳
- パトリック・ジェニングズ
（日本&英国<千葉県在住>）14 歳
- 池田 保美（東京都）14 歳

<若者の部>

- 皆川 風花（埼玉県）15 歳
- 加藤 佳美（東京都）15 歳
- クリステル・ジラー・コディラ
（フィリピン）16 歳
- モイス・ガサナ（ルワンダ）16 歳
- 藤井 俊嗣（島根県）16 歳
- 阿波 実果（大阪府）17 歳
- サレー・ムシャヒド（バングラデシュ）
17 歳
- ビビアン・ショットラー（ドイツ）17 歳
- イボン・フッジ・S・サントス
（フィリピン）17 歳
- ダリア・リンベット・レジェス・ペレス
（メキシコ）18 歳
- インナ・ボンダレンコ（ロシア）19 歳
- アビオドゥン・ダモラ
（ナイジェリア）20 歳
- フザイファ・シヤル（パキスタン）20 歳
- ビベック・クマール（インド）20 歳
- 小野 雄希（埼玉県）20 歳
- アリソン・キャンプベル
（ジャマイカ）21 歳
- イレネ・ラトラス・コルテス
（スペイン）22 歳
- パウラ・オルティス・サエンス
（コロンビア）22 歳
- ティンレー・チョーデン（ブータン）22 歳
- ボニフェイス・キムウエレ（ケニア）23 歳
- カロリーナ・ナタリア・オレスキエウ
イツ（ポーランド）23 歳

- サダト・ナジール（米国）14 歳
- 新田 早紀（茨城県）14 歳
- 河上 結香（東京都）14 歳
- ロレナ・ガマラ・デ・ソウサ・オット（ペルー）23 歳
- クリスティーナ・ロシアン（ルーマニア）24 歳
- ラビア・ラシッド（パキスタン）24 歳
- スコット・ハーバー（米国）25 歳

学校特別賞

該当校なし

学校奨励賞（40 校）

- | | |
|--------------------------------|---------------------------------------|
| アサンブション国際中学校（大阪府） | アントニオ・ホセ・デ・スクレ小学校（コロンビア・イタグイ市） |
| 稲城市立稲城第四中学校（東京都） | 茨城県立古河中等教育学校（茨城県） |
| 大田区立大森第六中学校（東京都） | 大妻嵐山中学校・高等学校（埼玉県） |
| 沖縄県立名護高等学校（沖縄県） | 神奈川県立横須賀高等学校（神奈川県） |
| 京都学園中学高等学校（京都府） | 近畿大学附属和歌山中学校（和歌山県） |
| グアダラハラ大学附属第 8 高等学校（メキシコ・ハリスコ州） | グアダラハラ大学附属第 15 高等学校（メキシコ・ハリスコ州） |
| こくご塾 KURU（東京都） | 国土館中学校（東京都） |
| サトリウイッチャヤ・スクール（タイ・バンコク都） | 佐野日本大学中等教育学校（栃木県） |
| シカゴ補習授業校（米国イリノイ州） | シック・コン・ミン・カワンガン・ケドゥア学校（マレーシア・ペナン州） |
| 昭和女子大学附属昭和高等学校（東京都） | ジョホールバル・レリジャス国立中等教育学校（マレーシア・ジョホールバル市） |
| 第 1 学校（ベラルーシ・ブレスト市） | 第 12 学校（ベラルーシ・ミンスク市） |
| チェヴレ大学（トルコ・イスタンブール市） | 筑紫女学園中学校（福岡県） |
| 中部テネシー日本語補習校（米国テネシー州） | チューリッヒ日本人学校日本語補習校（スイス・チューリッヒ市） |
| ツァフェル中学校（ブータン・八県） | 帝京高等学校（東京都） |

東京学芸大学附属国際中等教育学校 (東京都)	豊中市立上野小学校 (大阪府)
ヌエボ・レオン自治大学附属第 28 高等学校 (メキシコ・ヌエボ・レオン州)	ノートルダム清心学園 清心中学校・ 清心女子高等学校 (岡山県)
パデレフスキ私立グラマースクール (ポーランド・ルブリン市)	広島なぎさ中学校・高等学校 (広島県)
福島県立あさか開成高等学校 (福島県)	松本秀峰中等教育学校 (長野県)
名城大学附属高等学校 (愛知県)	立教英国学院 (英国ウエスト・サセックス州)
早稲田大学系属早稲田渋谷シンガポール校 (シンガポール)	SMK スリ・ナパー・スクール (マレーシア・ジョホール州)

国際ユース作文コンテスト選考委員 (* 敬称略・50 音順)

委員長	千 玄室	茶道裏千家前家元、ユネスコ親善大使
	西園寺昌美	公益財団法人 五井平和財団会長
	都倉 俊一	作曲家、一般社団法人 日本音楽著作権協会特別顧問
	松浦晃一郎	元ユネスコ事務局長
	美内すずえ	漫画家
	矢崎 和彦	株式会社フェリシモ代表取締役社長
	葉 祥明	絵本作家
主 催	公益財団法人 五井平和財団	
後 援	文部科学省、日本ユネスコ国内委員会、日本私立中学高等学校連合会、東京都 教育委員会 NHK 日本経済新聞社	
協 賛	株式会社フェリシモ、セイコーホールディングス株式会社	

2017 年度国際ユース作文コンテスト

【子どもの部】 文部科学大臣賞（最優秀賞）

自然から学ぶ

（原文は英語）

ネダ・シミッチ（12歳）

ボスニア・ヘルツェゴビナ・モドリチャ市

スベティ・サバ小学校

「自然は急がないが、それでもすべては成しとげられる」

—老子

学校で、私たちは自分たちとは別の世界のものとして自然について勉強します。でも本当はちがいます。なぜなら私たちも自然の一部だからです。人は自然を自分たちの目的のために利用しようとします。人間は自分たちが主人で、自然が自分たちのどれいであるかのようにふるまいます。自然から取るだけ取って、何も返すことをしません。それはとても残念なことです。なぜなら、自然はとてもすてきな教室になり得るからです。

初めて目を開けたその時から、私たちはいつも学習し続けています。自然は私たちにとって最高の先生になってくれるかもしれません。私たちの世代は前の世代よりも自然の中であまり時間を過ごしません。自然はどうすれば楽しく、健康で意味のある暮らしができるかなど人生について教えてくれます。イモムシがチョウチョに変身するように、人間も同じように変化します。この変化はみんなが経験するもので、さけることはできません。ただ、それから何かを学ぶことはできます。イモムシがきれいなチョウチョに変わるように、人間は学習を通して人格を改善し、育てることでより良い人間になることができます。

現代社会において最も大きな問題はひとりぼっち感です。みんな現代のテクノロジーに夢中です。仮想世界に生きていて、現実の世界を生きていません。みんな人と関わりを持たなくなりました。本当の友だちもいません。自分の人生を生きるよりもスマホをいじっている方がいいのです。私たちがやるべきことは、団結して世界をより良い場所にすることです。ひとりでは何も達成することはできません。1滴の水だけでは意味はありませんが、それが



たくさん集まれば巨大な海になります。つまり、ひとりでは大きな変化を起こすことはできませんが、協力すれば世界を変えることができるということです。

私たちの世代は自分のことしか考えていません。私たち自身や、私たちの生活のことに関心がありません。実はみんな同じような悩みや問題を抱えていること、そして他の人を頼り、他の人の思いやりを信じることで人生が楽になることを私たちはよく忘れてしまいます。私たちはオオカミを見習うべきです。オオカミは群れで生きています。オオカミは遊び心のある優しい動物で、何よりも家族思いです。よく「一匹オオカミ」という言葉を聞きますが、一匹オオカミとは自立していて自分の考えを曲げない個人主義な人のことを言いますが、でも実際にこのように生きているオオカミは少ないです。オオカミはメスでもオスでも、ある期間を1匹で過ごしますが、しばらくすると自分よりも大きな存在である「群れ」に戻ってきます。オオカミは一緒に狩りをして、おたがいの面倒を見ます。仲間がケガをした場合も置き去りにはしません。オオカミの友情は一生続きます。協力すれば成功し、1匹でいれば苦しむことになることを分かっているからです。それに対して、人間はそうではありません。私たちがオオカミから学べることはたくさんあります。

人は誰でもつらい時期を経験します。その時期にどう対応するかは人によってちがいます。自分の問題に対する解決策を見つけようとする人もいれば、それをするだけの勇気がない人もいます。落ちこんだり悲しんだりすることもあれば、後でやらなければよかったと思うようなことをしてしまうこともあります。私たちの人生は明るく虹色のことばかりではありません。自然も同じです。とてもいい天気がひどい嵐に変わることもあります。でも自然の中で暮らす動物たちはあわてません。雨宿りできる場所を探して静かに待つのです。いつか嵐は終わり、自分たちは安全だということを知っているからです。

2つの箱の話を知っていますか。父親が死ぬ直前にひとり息子に2つの箱をわたしました。1つは黒い箱、もう1つは白い箱でした。かれの人生でつらく苦しい時に白い箱を、そして最も幸せな時に黒い箱を開けるよう息子に言いました。息子は洪水によってすべてを無くしてしまった時に、白い箱を開けました。そこには「いつか過ぎる」と書いてありました。その後、すべてを手に入れた時にかれは黒い箱を開けました。そこには「そしてこれもいつか過ぎる」と書いてありました。永遠に続くものはありません。ラテン語の格言に「パンタレイ（万物は流転する）」という言葉もあります。自然を見てください。変わらないものは無く、すべては変化します。季節も、昼も夜も、気候も変わります。苦しい時でも人は絶望するのではなく、すべてはいつか過ぎ去ることを覚えておくべきです。

少し立ち止まって、いそがしい生活を忘れましょう。自分のための時間を過ごすことが必要です。ドアを開けて外に出て、自然から何が学べるかを考えてみましょう。

2017 年度国際ユース作文コンテスト

【若者の部】 文部科学大臣賞（最優秀賞）

マルベリー（桑の木）と私

（原文は英語）

ネハ・ラワット（22 歳）

インド・バラナシ県

ベナレス・ヒンズー大学

人生どん底だと感じたことはありますか？ 生きる希望を失ったことがありますか？ 私はあります。全てがうまくいかない時や、全てが灰となって消えてしまったと感じた時は、誰でもそのような思いを抱くのではないのでしょうか。そう、現実の世界では不死鳥が灰から蘇ることはあり得ないのです。

このような気持ちが長続きすることを、医療用語で「うつ病」といいます。

私は「うつ病」経験者です。「うつ病」になると、些細なことですら自分でコントロールできなと感じます。テストや家族関係、友人関係など、これらに関するほんの小さなすべての事が自分ではどうにもできない大きな障害に思えてくるのです。私はどんどん塞ぎこんでいき、何もせずに過ごす日々が増えていきました。人生なんて生きている意味が全くなく、嫌なことだらけだと思いました。お気に入りの趣味でさえ、ある日突然魅力を感じなくなってしまったのです。空っぽの天井をずっと見つめることしかできませんでした。

あの時、視線を天井から天窓に移していなかったら状況はあの時のままだったでしょう。天窓から 1 本の木が見えました。葉っぱはありません。生命が全く感じられず自分のようだと思いました。「死んだふりゲーム」の仲間を見つけたようで少しほっとしたのを覚えています。そこにいたのは、桑の木です。私はその木をマルベリー(桑)と呼ぶことにしました。

やることが 1 つできました。マルベリーを見つめ、なぜまだ死んでいないか考えるのです。母さんはなぜこの木を切らないの？ 命がないのになぜまだそこにいるの？ 私は、いつかマルベリーは自然に倒れ、新しい友達はいなくなってしまうのだろうと思っていました。そ



うしているうちに数日が過ぎ、数週間が過ぎ、数カ月が過ぎていきました。ある日、緑のコブが木の表面に大量にあるのを発見しました。小さな葉と桑の実が芽吹いています。さっきまで死んでいた木が、どうやってそこかしこに果実を実らせたのか？ その後、数日間で私は、命を失った木がこの世で一番美しいものに生まれ変わる様子を目の当たりにしたのです。今やマルベリーは全身を緑に包まれ、甘い果実を実らせています。ハチや鳥、リスなどの動物もたくさんマルベリーの所に集まってきました。

あの時の気持ちを表す言葉はまだ見つかりません。マルベリーは私に死から生還できることを教えてくれました。マルベリーが私にとっての不死鳥だったのです。マルベリーは死んだように見えている間も、ずっと命を育てていました。単に季節の問題だったのです。人生には、時に休息が必要です。休憩しているからといって命がなくなったわけではありません。そのことに気づき、考えが 180 度変わりました。植物が蘇ったのに私は何をしているのだろうか？ それ以来、私は幸せに、そして力強く人生を歩んでいます。今、こうしてこの作文を書いている間も、マルベリーは窓の外にいます。私の様子をチェックしているのかもしれない。

自然を観察していると彼らの信念が 1 つしかないことに気づきます。明日はないと思って今を生きる。植物や動物はどんな小さな生命であっても、自らの命を自ら絶つことは絶対にしません。

うつ病について学び始めて、多くの人がうつ病に苦しめられていることを知り、とても驚きました。今この瞬間も、新たな季節が来るまで希望を持ち続けることができずに自ら命を絶とうとしている人が大勢いるのかもしれない。2050 年には、世界の死因の一位が自殺になると言われています。患者の代名詞のガン、脅威と恐れられる AIDS を抜いて第一位に躍り出るのです。マルベリーが自らの言葉で死からの生還体験を伝えることができればどんなに効果的でしょう。命を絶つほど悪いことなんて人生にはありません。我々が心を開きさえすればマルベリーが私にしてくれたように、木や子犬からでも人生の素晴らしさを学ぶことができるのです。

今、私はうつ病と戦う人達のお手伝いをしています。誰かが笑顔を取り戻した時ほど喜びを感じることはありません。そうです、不死鳥は蘇るのです！

自分の挑戦は自分で選ばなければなりません。私の挑戦は、うつ病と闘う人々の助けとなることです。たった一人でも枯れた木に命を見出してくれる人がいれば、私の努力は十分報われるのです。

あつかい方ふるまい方を学ぶ

(原文は英語)

レ・ホアン・マイ (13 歳)

ベトナム・ハイフォン市

「ベトナム中部でまた洪水です。この地域を襲った豪雨によりこれまでに死亡者 2 名、行方不明者が数名出でています…」レポータの声に力が入ります。ベトナム中部での洪水はここ 2 週間で 2 度目です。ここベトナム中部では毎年といわず豪雨の度に洪水が起きるため人々は洪水に慣れきっています。私は立ち尽くし、食い入るようにテレビを見ていました。そして思ったのです。「この災害が人々に学んでほしいと願っていること、自然が教えようとしていることを人々が理解する日は来るのか？」と。ほとんどの人にそのような日はやってこないでしょう。でも、もっとよく考えてみれば自然が教えようとしていることが、簡単に理解できるはずで

す。自然が教えるのは、あつかい方とふるまい方についてです。「自分がそうしてほしいと思うように他に接しなさい」という教えです。

現代社会は大きな発展を遂げるため、お金を稼ぐため、そして生き残るためなどの理由で、自然から繰り返し様々なものを搾取してきました。人間の欲は尽きることがなく、自然への残酷さもエスカレートしていきました。不法な伐採や野生動物の捕獲までも行っています。昨年ベトナムでは、ハティン省、クアンビン省、クアンチ省、トゥアティエン＝フエ省など 4 つの省をまたぐ地域で危機的な水質汚染が発生しました。台湾のフォルモサ・プラスチック社が原因です。同社は有害物質を含んだ産業廃棄物を不法に排水管から海へ流し、多くの魚を死に追いやったのです。企業に躊躇はありません。なぜならお金儲けの喜びが地球資源の枯渇という恐怖をはるかに上回っているためです。しかし、自分で蒔いた種は、いつか自分で刈り取る時がやってきます。

例えば、木を伐採すれば洪水や地滑りだけでなく、さらに甚大な災害を引き起こし、人々の命や物が危険にさらされます。水質被害を受けた 4 省ではたくさんの魚の死骸が沿岸に打ち上げられました。ロイター通信によると、ベトナムがこの史上最悪の水質汚染から立ち直

るにはおよそ10年かかるとのことでした。

私たち人間は授業を受けているのだと思ってください。そこでは自然は先生、私たちは生徒です。本来であれば生徒は教室で先生の話をおきちんと聞き、先生は生徒の過ちを修正します。しかし私たちは同じ過ちをずっと繰り返してきています。いったいなぜでしょうか？先生の話をお聞いていないからです。過ちを犯すたびに私たちはまず自然の残酷さを責めますが、本当は真っ先に自分を責めるべきなのです。しかしこのことに誰も気づいていません。いつか自分たちがしてきたことを後悔する日が来るまできっと気づかないのです。

そうです。自然を死に追いやっているのは、私たちが利益のために犯した過ちです。自然は災害のたびに、我々に何かを警告したり、教えようとしていたりしているのです。

自然はこう言っています。自然に対し、寛大になりなさいと。そうすることで、人類に平和と幸福が訪れるのだと。それができなければ、我々も、自分がされたように冷酷無情に人間に接するのだと。

自然は貴重な宝です。魔法の力をそなえた完璧な創造物であり、言葉は発しないけれど、先生でもあります。私たちは日々たくさんのおことを自然から学んでいます。自然は愛や創造性にも満ちています。携帯電話を置いて散歩に出ましよう。目をつぶれば自然の美しさを感じられるはずですよ。自然は私たちが思うよりずっといきいきとしています。一度自然のささやきに耳を傾ければ、自然が発見すべきものや学ぶべきものにあふれていることに気づくでしょう。

心を開き、諦めることなく、自然から学び続けてください。自然が大切だということを他の人にも伝えてください。なぜなら自然は真に重要な存在だからです。

あなたに届けたい 2 つの贈り物

(原文)

親泊 千明 (14 歳)

沖縄県

宮古島市立平良中学校

人は自然から「活力と智慧」を得ることができる。

日々の生活の中では、幸せを感じて踊り出したり、生きる意味が分からなくなるほど辛いことが起きたり、想定不可能なことが次々と起こる。特に辛い思いをした時に、どのようにすれば楽天的になれるのだろうか？ 厭世的な考えになった時、私は自然と触れ合うようにしている。家から近い山林や海岸で、ただ何も考えずに散歩をしているだけで、裸足で砂を感じているだけで、いつの間にか自分の心が軽くなっていることに気が付いた。それを続けていたら、私は自然が大好きになっていた。

私達人間は自然から活力を得ることができると確信した私は、自殺を考えている人々を救う手立てとして「自然と触れ合うこと」を思いついた。今の日本には、自殺をする人が年に 2 万人以上もいるという。死を決意するほど心を悩ませている人が、どれほど苦しいのか私にはよくわからない。だが、みんな大切な命である。その命を救うために「自然の力が有効である」と私は声を大にして伝えたい。

私は週末、野鳥の観察をしている。春から初夏にかけては、巣作りの様子を見ることができ。やっと見つけたメジロの巣には、卵が確かに入っていたはずなのに、次の日に見てみると空だった。無残にも巣から落ちて割れた卵を見て、とても可哀想だった。強敵のカラスやイタチに襲われてしまったのだろう。親鳥はまだ巣の近くに居て、私の何倍も悲しんでいるように見えた。しかし驚いたことに、この親鳥たちは数週間後また新しい巣を作り、卵を産む準備をしていたのだ。彼らは前を向いて、必死に自分のやりたいことを実行している。その姿に感動した。と同時に自分も何があっても挫けないで前進しようという気持ちになった。このような生き物の姿を見れば、きっとすべての人が勇気づけられると思う。心の元気を無くした人がいたら「身近な林や海、川で時間を過ごしましょう」そういう考えが日本の

社会全体に広がっていけば、きっと自らがかけがえのない命を絶つ人はいなくなるはずだ。

実際に自然から多くのことを学んだ私は、たくさんの人に自然の素晴らしさを伝えたいと考えるまでに成長した。そこで「いつも通っている宮古島の大野山林のことなら、その魅力を人に伝えることができるかもしれない。」と思いつき、エコガイドツアーを企画して実行した。テーマは山林の生き物たちの紹介。いつも一緒に散策をしてきた友人との初挑戦だ。中学生がガイドをするなんて今まで聞いたことがなかったので、参加者は集まらないだろうと予想していた。ところが多くの申込みがあり、嬉しくて小さい子ども達にもわかりやすい説明をしようと一生懸命に考えた。生き物について伝えたいことって何？改めて自分に問いかけると、「智慧」という答えが出た。

昨年から生態を調べている大野山林内のインドクジャクは、成鳥をよく見ることができるのに、いくら山林内を捜しても巣や卵を見つけることができない。猟友会の方に尋ねると、クジャクは人が入れない海岸沿いの崖に繁殖していることがわかった。もしかすると、人に駆除されないように、わざわざ海岸線まで行って巣を作っているのかもしれない。これは生き延びるための智慧だと思う。

シロアゴガエルは水場の木上に卵を産む。親ガエルは、わざわざ2 m以上の木に登って産卵するのだ。その理由がわかったのは、弟が卵を木から池に落として遊んでいる時だった。拳くらいの丸くなった麩のような白いカエル卵の周りに、池の水中からカメが寄ってきて食べ始めたのだ。つまりカエルは、卵が孵化するまで食べられないように木の上に産卵しているのだ。すごいなあと感心した。そんな生き物たちに出会うたびに「すごいよ」とみんなに伝えたい。人は自然からたくましく生きる智慧を学ぶことができるのだ。

自然からの贈り物「活力と智慧」を多くの人に伝えたい。あなたの笑顔がみたいから！

知識と本物

(原文)

海野 樹 (16 歳)

東京都

大妻中野高等学校

物心のついた頃からビルに囲まれた生活を送っている私にとって、自然は身近で、それでいてかけ離れた不思議な存在だった。

自然は素晴らしいもの、人間と関わりが深いもの、そんな「知識としての自然」を道德の時間に何度も習い、何度も作文を書いてきた。

勿論、自然を体験したことなど一度もなかったが、習ってきた知識は表面上の言葉を生みだし、及第点をもらうには十分すぎる程だった。そのうち、私の中での「知識としての自然」はいつの間にか知識としての枠を超えて「本物の自然」として確立していった。

そんな私にとって転機となったのは 15 歳、高校 1 年生の夏休みに行ったオーストラリアへの短期留学だった。

特に海外留学に対して強い関心があったわけではない。高校生になり、周りが進路や将来の夢を確立していっている中で、未だに決めかねていた私は焦燥感に駆られ、とりあえず視野を広めよう、という軽い気持ちで応募した。

期待と不安とが入り混じった何とも言えない気持ちで向かったオーストラリア。空港からバスで学校へと向かい、バスが止まって引率の先生が言った。

「ここが皆が、2 週間通う学校です。」

バスから降りて辺りを見回し、私は目を疑った。目の前に溢れんばかりの草原が広がっていた。風車が軒並み置かれていた。これが同じ高校なのか、終わりが見えることのなく広がるその景色に、自然に言葉を失った。言葉で表現できないその自然の雄大さに、私は今まで習ってきた「知識としての自然」の無力さと違いを痛感した。そして、15 年間生きてきて初めて心から思った。自然は素晴らしいものだ、と。

洗礼とも言える本物の自然に対する衝撃から始まったオーストラリアでの生活は、新しい

発見の連続だった。

東京で過ごしていた時は、毎日 SNS を使い、動画を観て、休日は友達と話題の店に行つて、の繰り返しだった。

けれども、オーストラリアでは一度も SNS の使用や動画を観ることはなかった。

滞在中はホームステイだったのだが、朝起きると子供たちと家の近くを一緒に散歩した。放課後は近くの川で水遊びをして、暗くなると星明りを頼りに帰った。休日になると、近くの山を登って滝を見たり、船に乗って少し遠くの島まで行って海で泳いだ。

東京での虚しく過ごしていた時間は、「自然」を交えるだけでここまで輝きに満ち溢れた素晴らしいものになるのか。強く強く考えた。

ビルから漏れる光よりも、夜空に浮かぶ無数の星のほうがずっとずっと明るかった。エアコンの風よりも川の水のほうがずっと涼しかった。SNS で話題の店に電車に揺られて行くよりも、船に揺られて行った名前も知らない島の方がずっと楽しかった。化粧で飾った顔よりも、砂をつけたくしゃくしゃの笑顔の方が輝いていた。美しかった。

自然と人間は共に生きるべき存在だと思う。

「日本人は時間を守る」

海外の人からの日本人の印象だ。とても良いことであり、必要なこと。

それでも、私は自然に触れて気がついた。

「日本人は時間に支配されている」

現代の日本では、毎日時間を気にしている、支配されていると言っても過言ではない。時間に合わせて生活することは当たり前だ、と考える人が多い。実際私も 15 年間そう考えて生きてきた。

だが、そうあるべきではないと学んだ。

人間は「本物の自然」から時間を学び、それを未来の、明日からの生活に活かして生活するべきだ。

道徳的な「知識の自然」ではなく、「本物の自然」は私たちに本来あるべき時間の流れを教えてくれる。

自然という大きな存在から時間を学べば、世界は広がり、行動の選択肢が広がる。

そしてそれは、今後日本を発展させていくためには必要不可欠な事だろう。

本質を知る

(原文は英語)

アナ・グリゴリャン (20 歳)
アルメニア・エレバン市

私は石の壁の囲いの中から、緑に囲まれた世界へと踏み出します。1、2、3。冷たい風がその場を吹き抜け、私を心躍る旅に連れ出します。これを読んでいるあなたも一緒です。空高く舞う鳥たちが見えてきました。翼から鳥たちのパワーを感じます。彼らはどこまでも続く青い空を泳ぎ、ふかふかの雲にダイブしていきます。すると突然叫び声が聞こえてきました。

「見ろ！ 巨大な鉄の鳥が鳴き叫びながら、真後ろにせまってきた！」鉄の鳥が通った後には白い煙が続き、空の静けさは重い翼で打ち破られました。私たちは鉄の鳥に追突され、空も鳥の群れも見失ってしまいます。ものすごいスピードで落下し、海に飲み込まれました。深く賢い海。壊れた翼を受け入れて、羽をヒレに替えてくれました。またしても自然に癒してもらい自由を手に入れます。歩けるようになったばかりの赤ちゃんのように、好奇心いっぱいに救いの海の深みへとダイブしてみます。色とりどりの魚達が絵の具の雫のように私たちを包みます。暗闇を深く潜っていくと、そこには魚やサンゴではなくゴミと有害物質がありました。その時です、ものすごい力の何かが大きな網で私たちの自由を奪います。どうすることもできません。罨にかかったのです。そのまま船まで連れて行かれました。1、2、3。「冷たい死の息を顔に感じますか？」。さあ、もう帰る時間です。帰り道では、無残な姿にまで破壊された森を目にし、スモッグに煙る工場地帯を通り、異臭を放つゴミ山にも遭遇しました。

我々はこれまでにたくさんを自然から学ぶことができました。今では、鳥のように空を飛び、魚のように水に潜ることができます。太陽熱や風力を利用し、植物や樹木からは薬、天然の油からは熱を得ています。しかしながら自然から多くを学べば学ぶほど自然は破壊されていき、自然と人間の距離はどんどん離れていきます。我々人間は、自然の物理的な素晴らしさを模倣する前に、自然の存在そのものについての基本原理を理解しておく必要があったのです。

さあ、一緒に次の旅に出かけましょう。今回は小さくて無力な雫になります。お父さんは

雲、お母さんは太陽です。兄弟姉妹とともに雨として地上へ落ちていきます。ドスン！！
美しい葉っぱの上に着陸しました。さらに下に落ちるには葉っぱが傾くのを待つしかありません。辛抱です……。人類にはこのような忍耐力が必要です。忍耐力を学ぶ過程で、平和の基礎が身についていきます。憎悪や敵意がなくなり、戦争で血を流す必要もなくなります。

だいぶ待った後、ようやく葉っぱから川に落ちることができました。そこは大勢の雫の仲間であふれかえっています。最初は圧倒されますが、しばらくすると笑顔がこぼれます。全てのものは大きな何かを支える、小さくてともすれば見過ごされてしまう一部分です。人間は自然を見てこのことをしっかり理解しなければなりません。しかし、小さな一部分だけでも、これがなければ大きなものは存在しえないのです。人間中心に地球が回っているわけではないことは、受け入れたくない事実でしょう。しかし、この重要な事実を理解して初めて自分自身と調和を取ることができ、自分のルーツ、すなわち「母なる自然」に向き合うことができるのです。ところが、やっと見つけた雫としての自分の居場所の世界は、またすぐに変わってしまいます。一筋の温かな光によって、川から空に引き戻されてしまうからです。

「もう終わりだ」と思うに違いありません。しかし、その時こそが、雨の雫としての、終わりのない命のサイクルが始まった瞬間です。

我々に終わりはありません。我々は自然界に永遠の命のサイクルがあることを知っています。木、動物、水、それら全てが自然の中では永遠です。人類が学ぶべき一番重要なことは、我々自身が自然であるということです。雫と同じように我々も永遠なのです。我々も常に生き続けていて、単なる人間の命を超えたもっと重要で完璧な何かの一部を担っているのです。このことが分かれば全てのことが単純明快に見えるでしょう。

自然から学ぶ

(原文は英語)

アージーン・ワカス (9 歳)

パキスタン・ラホール市

自然にはさまざまな面があり、その中でくらすすべての生き物にたくさんのことを学ぶ機会をあたえてくれます。私たちはみんななにかの形で自然とつながっていて、自然から多くの気づきをえています。自然にあるすべてのものには存在している理由があります。自然は生活に必要な食料や住むところ、服、遊びなどをあたえることで、私たちの生活を楽にし、母親のように育ててくれます。自然に生きるものは全部バランスが取れています。自然にはかくされた意味があり、それを正しく知ることによってたくさんの人生の教訓や発見をえることができます。今の私たちの発展は、自然を注意深く観察し、そこから学習した結果手に入ったものばかりです。

自然界にあるすべてのものにはそれぞれのライフサイクルがあり、ある生物のライフサイクルの終わりが別の生物のライフサイクルの始まりになる場合があります。これは自然がいろいろな形でじゅんかんしていて、自然界には役に立たないものやむだなものはないということをしめしています。例えば、とても小さな微生物は死がいや排せつ物を分解することで植物の生命やライフサイクルを保ち、環境を守るのに役立っています。そして、これらの植物は人間だけでなく、その他の生き物に食料や資源をあたえています。

自然は私たちに努力、調和そして規律の大切さを教えてくれます。分かりやすい例は小さな昆虫のアリです。アリはいつも集団で規律のある行動を取ります。かれらは小さな生き物が運ぶのは無理だと思えるような、自分の体よりもかなり大きな食料を運びます。また、微小な有機生物からも学ぶことができます。同じ種類の動物はより速く効率的に働けるようにおたがいに助け合うことがよくあります。私たち人間もこの能力を動物から学ぶことができます。もし人間がこの能力を使えば、計画的に動きおたがいに協力し合うようになるため、より速く効率的に働けるようになります。

動物を観察することで私たちはサバイバル技術や恐怖に支配されない生き方を学ぶことができます。これらのサバイバル技術はあらゆる捕食者と被食者によって使われています。その1つがカモフラージュで、被食者は捕食者の襲撃から身を隠すために、そして捕食者は被食者の背後にこっそり忍び寄るために使います。人間が使った例としては、戦争中の陸軍兵士が敵やその基地にこっそりと忍び寄ったり、恐れずに前進したりするためにカモフラージュするなどがあります。

種から芽生えた芽が成長し、新しい植物へと育つ姿は私たちに希望を教えてください。もし人間が希望の種を植えて、自分たちの努力はムダにならないと信じて愛情を注ぎながら世話をして育てていけば、将来実を結ぶことでしょう。

鳥の群れは協調しながら飛んでいて、おたがいにぶつかることはありません。おたがいのボディランゲージを理解しているのです。そこから人間は、コミュニケーションは言葉だけではなくボディランゲージや感情を読み取ることでもあること、そしてこの世界をより良い場所にするためにおたがいに支え合うべきだということを学ぶことができます。

木や小さな植物たちはおたがいに育つための空間を譲り合いながら庭に生えています。ほふく植物やつる植物は木々から育つための助けを得ていて、木々は他の生き物に食料や住まいをあたえています。私たち人間も、他の人の成長や生活を助けるために、おたがいに支え合えるようになることができるはずです。私たち人間が自然から学べば、この世界をもっと住みやすい場所にするができるでしょう。

わたしたちが優しくなれば

(原文)

石川 咲希 (11歳)

大阪府

関西創価小学校

わたしは、自然は人の感情のように思います。自然を大切に優しくあつかえば、すみきった空、きれいな空気をくれます。自然を乱用してしまえば、自然も怒り、かみなりを落とします。そして悲しいのか、酸性雨をふらしてきます。

わたしは小さいころ、おばあちゃんの家近くにある公園によく行っていました。おばあちゃんと樹木のトンネルをゆっくりと歩きながら、こんなことを思いました。

「どうして木は優しい感じがするんだろう。」

わたしはいつも木を見ると、絵や写真に木を写したくなります。そして木を写すことで、自分の心も優しくなれる気がします。おばあちゃんで行った公園の木以外にも、駅の前の木、学校の桜の木、どの木も優しい感じがします。これは、自然だからだと私は思います。自然を大切に優しくしているから、自然がわたしたちに優しくしてくれるんだと思います。

でも、最近地球温暖化など自然破壊がおこっているから、世界の代表の人たちで話合っている、という内容のテレビを見ました。地球温暖化のことを五年生で学習して、地球温暖化が進むと自然が減り、いずれは人間などの生き物が地球に住めなくなるということを知って、こわくなりました。

人の感情のような自然が今、怒って悲しんでいるんだと思います。もっと人間が自然に優しくしたらいいのにと 생각합니다。

では、どのように優しくしたらいいのでしょうか。私は考えて考えました。

第一に、自然の美しさを知ることが大切だと思います。自然っていいな！と思えば優しくできるはずですよ。その次に実行します。すると、美しい自然のためにという心が表れ、長続きすると思います。どうやってなにをすればいいかはもうみんな分かっていると思います。もっと工夫できると思います。例えば宝くじです。宝くじ会社の利益の五パーセントを木を

植えるために使ったり、自然の美しさを知って大切にしてもらおうための講演会にきふしたらいいと思います。

また、学校が重要だと思います。学校の学習の中で自然のことを学ぶのです。その他にも地球温暖化のことをグループで話し合えばいいと思います。今の小学生、中学生、高校生はあと二十年でもうじゅうぶんな大人になっています。その時に、自然に対する優しさがあれば自然は守られます。逆に学ばなかったら、地球があればはててしまい、地球に住めなくなります。なので学校で地球の環境のこと、自然のことを考えさせるべきです。

そして自然をどう未来に生かすかを考えます。もしかしたら科学が発達して自然を人工的に作るかもしれません。そうしたら本当に自然なんでしょうか。今の自然を残すために自然に優しくする必要があります。

では、なぜ自然に優しくするのでしょうか。自然に優しくすることによって、自然がわたしたちに美しいと感じる心と資源をわけてくれるからです。

いつまでもおばあちゃんに行った公園の優しい木が見られますように。

これから、わたしなりの挑戦をしていきたいと思います。

目的

(原文は英語)

ジェシカ・アールンド (12 歳)

ニュージーランド・タウランガ市

私たちが生きているこの巨大な現代社会の中では、自分たちが重要であること、つまり集団の中においても影響力を持っていることを忘れがちです。時々、私たちは自分のことを世界に溶けこんでしまっている平凡な存在で、存在する意味などないように感じることもあります。また、全然必要とされていない存在だと感じることもあります。しかし、そんな風に思う必要はないのです。

考えてみてください。もしあなたの身体の中にある化学物質の1つが存在していなければ、あなたはまるでちがうものになっています。これらの物質は今、そして未来のあなたを形作り、そのために戦っているのです。もしライオンの群れの中のたった1頭でも狩りをしなければ、群れ全体の足を引っぱってしまいます。生存率は下がってしまいます。たった1頭でもです。動物や植物、細ぼう、原子など、自然界のすべてのものには存在する理由があります。みんなそこに存在する意味やすべきことがあり、何かの役に立っているのです。どんなに小さくてもそれが存在しなければすべてがまったく変わってしまいます。私たち人間も同じです。私たちもこの自然の一部であり、この世界、そしてその未来に対して責任があります。また、みんなそれぞれの存在理由やストーリーがあり、周りに影響をあたえることができるのです。どんなことにも意味はあります。

「大海の一滴」という言葉を聞いたことがありますか。よく「大海の一滴に過ぎない。何も変わらないよ」というように使われます。2016年だけを見ても、6億6300万もの人たちが、私たちが当たり前のように使っている清潔な水を利用できていませんでした。それは地球上にいる10人に1人になります。私たちにとってはじゃぐちをひねるだけのことが、他の人にとっては1時間歩かなくてはいけない場合があるのです。でも、その人たちを助けるために私たちにできることなんてあるのでしょうか。自分のような個人が何かしようとしても大海の一滴のように意味がないのではないのでしょうか。私たちの視点で見たらそうかもしれ

ません。でも、その1滴を水不足で苦しんでいる人にあたえたら、大きな意味を持ちます。

何も変えられないのではないかと怖がって自分の信じることのために立ち上がれずにいる人が多すぎます。でも、もしその1つの思いやりの行動が1滴の水だとしたら、その1滴がどれほど遠くまでたどり着くことができるか想像してみてください。その1滴は休暇中の誰かが泳ぐ水になるかもしれないし、だっ水状態の子どもの命を救う水になるかもしれません。また、1年間、日照りに苦しんできた国に降る雨になるかもしれません。すると、たとえそうしようと思っていなかったとしても、その1つの思いやりの行動は拡大し、世界中に広まるのです。

私たちはミツバチの群れのようにみんなつながっています。それぞれのハチにはやらなくてはならない仕事があります。ハチたちはチームで働き、その結果、世界中の植物はハチたちが運ぶ花粉によって生きています。ミツバチのように、私たちの人生も独りで進まなくてもいいのです。むしろ、周りの人たちによってより良いものになる場合があります。この自然界の多くの要素についても同じことが言えます。それぞれの動物がそれぞれの仕事をするので、すべてが調和するのです。多くの人間とちがって、動物はやらなくてはならない仕事だけに集中します。私たちも動物を見習って、他の人をうらやましがってばかりしないで、自分の人生を歩み、自分のストーリーを自分で書いていくべきだと思います。自分たちの目的に集中するべきです。

では、私たちがここにいる意味とは何でしょうか。それが何かを想像したり予測したりすることはできますが、本当はだれも知りません。そして、一生知ることはないかもしれません。でもそれを理由に達成したい目標ややるべきことを探することを止めるべきではありません。この世界は私たちや先人たちによって作られた問題であふれています。ただ1つ明らかなのは、私たちの目的は問題をつくる側になることでも、周りと同じことをすることでもないということです。なので、私たちは自分の人生を精いっぱい生き、自分の才能を利用し、おたがいに助け合い、そして生きる理由を見つけましょう！

私たちが食べる植物から大空を飛ぶ鳥まで、自然界に存在するすべてのものには意味があります。私たちにも人間として存在する意味があります。でも、探求したり新しいことに挑戦したりしなければその意味を見つけることはできません。だから、すぐにでも一緒に行動しましょう。あなたは这个世界に存在する理由を持つ大切な存在です。あなたには目的があるので。

自然：丘の奥深さ

(原文は英語)

アヌシュカ・バンサル (14 歳)

インド・ニューデリー市

ベンカテシュワル・インターナショナル・スクール

人類とは満足を渴望する生きものです。でもそれはいったい何のため？ ある日私は自分の部屋の窓辺に座り考えました。

親愛なる私の日記へ

十代は毎日がストレス。人生なんて週末の雨のウィガンぐらいつまらないって感じる。ストレスが最高潮に達した時だった。灼熱の太陽のなか学校から帰るとサプライズが待っていた。ヒル・ステーションに行くから準備してって母に言われた。ほっとした。「2 時間後に出発よ。」その言葉に笑顔があふれた。

私が住んでいるのはインド。自然との距離が近いことで知られている。皮肉に聞こえるけど、私の町で自然の美しさを目にすることはほとんどない。植物は車の排気ガスや酸性雨にとりつかれて存続も危うい状態。そんなところに癒しを求める人はいないでしょ？ 喧騒にまみれたデリーを出て休憩なしで運転して 9 時間、ウッタラーカンド州の北、のどかなランズダウンの町に到着。

山に囲まれたヒル・ステーションに近づくと、私の胸は新鮮な空気で満たされた。入口ではピシッとした案内係りの 2 人が笑顔で出迎えてくれた。町の伝統的な料理もふるまってもらえた。胸に抱えた怒りは全て消え去り喜びにみたされた。と同時にぎこちなくだけど「ありがとう」が言えた。やっと落ち着いた。

さわやかな風に迎えられた。なんということもなく、宙に手を伸ばし、ダンサーみたいに揺らしてみた。すると風に帰るよう優しくいざなわれた。自然に帰りなさいと。

自然に帰る…

新鮮な芝生に寝転がり空を見つめていた。ミツバチがブンブン飛び回る音を真似してみた。空気いっぱい幸福が反響した。真の満足感を味わった。

ずっと探していた答えが見つかった。ユーレカの瞬間。バスタブではなく空の下。まさにエピファニー。うきうきした。

快適さを満足感と勘違いすることはよくあることです。でも真の幸福は自然にあります。なぜなら自然の中では内なる自分とつながることができるからです。自然は全てを包む全体です。無邪気に夜空に北斗七星を探すこどもらしい私も、生まれたばかりの赤ちゃんと比べた種の成熟も。我々人間社会は、偉大なる師のありがたみを忘れてしまっています。科学のおかげで我々は最も快適な椅子と最も便利な道具を手に入れることに成功しました。しかしそれはいったい何のためでしょう？ 今以上に脳を酷使するため？ それとも、素晴らしい人間の知能を自動で動く機械に成り下がらせるためでしょうか？

人間は戦争で使う恐ろしい兵器よりずっと大きな力を自然から得てきました。我々はリングが木から落ちたことで万有引力の法則を発見することができたのです。自然は我々に誇りもちなさい、そして些細なことにも幸せを見つけなさいと説きます。朝露、満開の花々、空の雲。大切なことは一時の幸福感ではなく内から湧く充実感です。アインシュタインが生み出した究極の物の捉え方は彼の「自然を深く観察しなさい。そうすれば全てのことをもっと理解できます。」との言葉によく表されています。自然に飛び込めば物の見方が変わり他者を尊重せずには生きられないことに気づきます。単純に考え寛大に対処することこそが成功への近道であると自然は言っているのです。自然は潤沢であると同時に相互依存の側面を持ちます。人間もそれを見習うべきです。自然界には上品さ、静けさ、他者を尊重する心、互いを助け合う優しさ、喜びがあふれ、全てを保つバランスも備わっています。まさに現代のリーダに求められる資質です。将来の成功は今にかかっています。内なる満足は触媒となり将来我々を成功へと導きます。そして、この内なる満足は自然の奥深くでしか見つけることができないのです。

窓辺に座って空を飛ぶ鳥を見ながら今また考えてみた。自然に入ってみてやっとなり必死に探し求めていたことに気づけたなって。それはこれから訪れる未来だったって。

空の蒼さ、命の重み

(原文)

ウムルベク ツグゾルマ (14 歳)

モンゴル国ウランバートル市

新モンゴル小中高一貫学校

かつて私たちの祖先は命がけでマンモスを狩ったり、手間暇をかけて稲作をしてきました。今はどうでしょう。きっとインスタント味噌汁を飲んだり、あるいはファストフードで済ませる人もいるでしょう。味噌汁のだしとなる鰹節はどこかの海でとれたもの、ねぎはどこかの畑で生えたものです。ハンバーガーのミンチも、ナゲットも自然-動物から頂いたものです。つまり私たちの命は、自然からの恵みや動物の犠牲によって成り立っています。しかしそれは悪い事ではないと思います。私たちの体は常に脂質やアミノ酸を必要とし、それは生きてゆくうえで大切な物だからです。しかし、最近は何かが人々の目には見えなくなっているかもしれません。

私たちの祖先、遊牧民は自然を敬い、生き物の命を大切にしてきました。肉しか食べない野蛮な民族とされたことを考えるとかなり矛盾していますが、それには誤りがあります。彼らはヒツジや牛を飼い、各地を転々としていました。寒冷で乾燥した不毛の地に野菜は生えず、彼らの食事は肉と乳製品でしたが、肉はスタミナがないと乗り切れない冬場に留め、他は乳製品だったといわれます。冬場、屠畜したのは丸々とした羊ではなく、年老いたものが衰弱して冬を乗り切ることができないと判断された羊だけでした。まず羊を仰向けにし心臓の近くにナイフを入れてある血脈を切断します。そうすれば羊は苦しまず、地面に一滴の血をこぼすこともありません。彼らは大地に血を落とすことは忌まわしいと考えたからです。羊の肉や血、骨や毛はすべて使われ、捨てられるものはありません。彼らはそれが動物への感謝を表すと考えたからです。私は日本で 8 年暮らし、去年モンゴルに帰ってきました。去年の夏は田舎に行きましたが、そこで出た食事には戸惑いました。羊肉は独特の匂いがあり、肉以外に耳や舌もありました。私はそれを気持ち悪いものとしか見ていませんでしたが、あることで実感したことがあります。ゲル（移動式の家）から離れた場所のトラックの荷台に

羊がいました。羊は逃げようとはせずじっとしていました。最初、そのことは気に留めませんでした。夕方出てみると羊は消えていました。父に聞くと、羊はこの別荘地の食料のために連れてこられたのだといました。夜、食事のために肉を買いましたが、その羊の肉だと思えば料理を食べられません。しかし、母は本当にその羊がかわいそうだと思うなら食べなさい、と言いました。食べなかったらゴミになるけど食べれば羊はあなたの中で生きていくのだと。その時、私は単なる文字ではない、命という言葉の重みを実感したと思います。後になって草原を見渡すと、延々と続く山脈やどこまでも蒼い空と舞う鷹、山麗を流れる川がどんどん広がって、心の中も埋め尽くしていくようでした。自然はただただ大きくて、それに私は圧倒されるだけでした。

そして私は学びました。人間は決してほかの生き物からかけ離れた存在ではなく、自然の中ではみな平等なのだ。私たちはよく動物じゃあるまいし、と言います。しかし実際私たちも動物ですし、他の生物を見下す人間優位ではなく、ほかの命によって生かされていることに感謝すべきです。ですが、今の便利な社会ではどうでしょうか。ナゲットのチキンを食べる前に、コンビニの弁当を食べる前に「いただきます」を心から言える人は何人いるでしょうか。結局、人間は最先端技術や超高層ビルの中にいたって空気を吸わなければ、食べ物を食べなければ死にます。私たちは動物や植物などの自然からの恵み、つまり自然そのものに生かされています。私はあの夏、自然から命の重み、生かされていることへの謙虚さを学んだような気がします。それを知れば生きること、ほかの生物を護ることにもっと真剣になれそうだと、技術の発展やその狭い枠を超え自然をちゃんと見ることができそうだと、そう思うのです。だからまずはその「いただきます」に心を込めて。

共生の心

(原文)

喜安 千香 (16 歳)

神奈川県

神奈川県立横須賀高等学校

祖父母の山小屋が八ヶ岳周辺の山林の中にある。五十年の歴史ある小屋である。私は幼い頃より、夏になると家族とここで過ごした。

私はここで多くのことを学んだ。山の中の小屋であるから、毎年おびただしい枯葉が屋根に積り、雨樋には枯葉がぎっしりつまっている。私はこの屋根に登るのが大好きだ。やわらかな木々の葉の木漏れ日や遠い山の景色、吹きぬける風を肌で感じられ、夜は宝石箱をひっくり返したような満天の星空を眺められる。また、春になって屋根に積もった枯葉を掃こうとすると、冬の間厳しく積もった雪の下で圧縮された枯葉は粘土の塊のようになってびくともしない。屋根にこびりつき雨樋をつまらせているこの枯葉の塊は私達には「やっかいもの」であるが、この「やっかいもの」は実は都会にあっては野菜をよく成育させ、花をきれいに咲かせるための肥料であり、人間はこれを利用しているのである。自然の中で自然に形成され、山の中ではそこら中にあるものを一定の付加価値をもったものとして人間が小さく切りとり利用しているのだと改めて気付かされた。

私はここで多くのことを学んだ。山小屋の横に立つ大きなくりの木の下のくり拾いは毎秋の大きな楽しみであったが、私が山に行ける月日にくりの木も自然も合わせてはくれない。たいていは虫に既に先を越されていて、表面にあいた穴の中には、小さな先客がいるのである。「虫さんに 先を越された くりひろい」私が小学生の頃に読んだ句だ。私はその頃自分も虫も対等に感じていて、先においしいくりにありつく競争に負けたのだと思っていた。この句を詠んだ時祖父は言った。「そう、ここは森の中の生き物が先にいて、私達があとから来てここに住まわせてもらっているんだよ。」

だから小屋の布団にもぐり込んだヤマネが穴をあけていようが、家の中に蛾が入ってこようがおかまいなし。そう、私達はあとから来たのだ。決して殺虫剤をまいたりせず、じっと仲

良く共存すればよい。祖父はそう教えてくれたと思う。

私達はともすると科学の力で自然を支配しているように感じるが、本当に大切なのは私が祖父から学んだ、人間は自然の中に「あとから来て入れてもらっている」という謙虚な感覚なのではないか。そして生物同士お互いがお互いを生かし合い生きていくという当たり前の感覚、それを忘れずにいたい。

今世界では年々森林が消失しているという。そこから二酸化炭素を吸収しきれない世界が生まれ、地球の長年の生物界のサイクルを壊し人間にとっての悪循環が生まれている。私達が地球で生き延びていく為には自然の中に「あとから来て入れてもらっている」という意識を常に持ち、常に周りの環境とのバランスを考え、謙虚に周りとの共生を考えるべきなのではないか。どんなに科学技術が発達しようとも私達は自分対他者の間に常に共生を考えるべきなのだと思う。人对自然しかり、人对人もしかり、さらには国対国の共生の気持ちも必要である。住む地域が違えばおのずとそこに住む人々の文化は異なってくるわけで、お互いがお互いの文化の違いを尊重しなくて人類の未来はないのだと思う。どちらかの文化が勝るなんてことはありえないのだから、違いを受け入れ寛容な心を持つことが世界平和にもつながるはずだ。共生によって、生きとし生けるものすべてがつながる共存の世界を私は願ってやまない。

母なる自然

(原文)

ザーマン モハ ノエル (17 歳)

埼玉県

筑波大学附属坂戸高等学校

「森は人間にとって欠かせない存在だから森林伐採は深刻な問題」
今までそんなことは幾度となく聞いてきた。しかし「なぜ森林が重要なのか」「なぜ森林減少は深刻な問題なのか」それまで「自然」や「環境」に関して全く興味・関心のなかった私にはわからなかった。

しかし、そんな私の考えが二年生の時に国際 FW に参加したことによって変わった。私の学校の国際 FW のメインテーマは「インドネシア 100 年の森プロジェクト」で、現地の姉妹校との混合チームに別れ「環境教育」「地域開発」「エコツーリズム」のそれぞれの観点から、一週間の共同生活を通して、インドネシアの森をどうしたら 100 年先まで守っていけるのかを考察をし、行動に移すというものだ。

私は、「地域開発班」として活動を行った。私たち地域開発班は、地元の婦人会である PKK と協働し、彼女たちの作っている地元のお茶やレモングラスを使った石鹸をどうすればもっと売ることができるのかについて考えた。なぜこの活動を行ったのか、理由は主に二つある。一つ目は、婦人会は石鹸づくりを通じて雇用を生み出し村落の活性化に取り組んでいるため、婦人会の活動を促進すれば村落開発につながると考えたから。二つ目は、婦人会が森林保全に務めているために、彼女たちの活動を促進すれば間接的に森林保全につながると考えたから。

私は、この活動を通じてあることに気がついた。私が訪れた村の大半の人は収入を「森」や「自然」から得ていた。農作物を育てたり、森からとれるもので商品を作って販売したり。私が気づいたこと。それは「人々の生活自体が森と密接に関わっていること」だ。私は今まで二酸化炭素を吸収し、酸素を排出することだけが森の役割だと思っていた。先進国や途上国の中でも「都市」に住んでいる人はそう思いがちである。しかし、そんな人々も気づかな

いところで森の恩恵を受けながら生活を送っている。

有名な例でいえば、都市で生活をしている人は、ストレスを発散したり、気分転換をするために時々「自然豊かな場所」を訪れる。

私は、自らの過去を思い出し、そのことを再認識した。

私は昔から無意識に「自然」が好きだった。なにか落ち着くし、悩んでいることも忘れることができた。そのため私はよく近所にあった「自然公園」に訪れていた。そんな私はいつから「自然」のありがたみを軽んじるようになってしまったのか。

それは、人の成長に似ているかもしれない。産んでもらった母に対しての感謝を忘れ私たちは、年を重ねるにつれ母に対して冷たい態度をとってしまう。

森や自然との関係もそのようなものだと感じた。常に恩恵を受けながら生活を送っているのに、ありがたみがわからなくなってしまう。

「森・自然は人間の母である。」だから、誰も自然の豊かな場所を訪れた際にリラックスすることができる。

産業の中心が農業から工業に移ってしまった今。人々の居住地が自然豊かな場所から都市に変わってしまった今。私たちは自然から受けている恩恵を軽んじてしまうこともある。しかし、「私たちの生活は自然によって支えられていること」「自然は私たちの生活には欠かせないこと」を私たちは自然から学ばなくてはいけないと思う。非常に単純で当たり前のことかもしれない。だが、そんな当たり前で単純なことが一番大切なのだ。

前述した通り、「自然は私たちの母だ。」私たちはそんな母なる自然を後世に残していくためにも、身近なところから自然を守るためにできることを少しずつするべきだと私は思う。一例として私は現在、環境に配慮したファッション「エシカルファッションの重要性」について研究している。私はこの研究を通じて、多くの人に自然の大切さ、尊さを伝えていきたいと考えている。

どんな環境問題も「母なる自然を愛すること」によって解決する。なぜなら、自然を愛することによって人々の考え方や行動が変わると思うからだ。

自然と農業—生命観

(原文は英語)

アナンダパドゥマナバン・ビジャヤクマール (20 歳)

インド・ケーララ州

私たちの生存に必要なだけでなく、自然界に最も近縁な実存的かつ人類学的活動の 1 つである農業ですが、その背景にある実践や考え方を深く掘り下げなければ自然と人類の関係を理解することはできません。

過去 100 年の間に起きた人類史上最も重要な進歩の 1 つに「緑の革命」と呼ばれる大規模な農業革命があります。それは切望されていた数百万人のための食糧安全保障を強化する促進剤になりました。

しかし、私たちは「緑の革命」の余波、つまり、それまで栽培方法として主流であった持続可能かつエコロジカルな方法を排除することによって生じる影響に気付くことができなかったのです。現代の農業は、かつて存在した数え切れないほど多種多様な作物や種を排除し、多くの基本的な生態学的決定因子を除外してきました。それらの作物や種は、長い年月をかけて、その地域の生態系や気候に適応するよう進化してきたものでした。

昔のその土地固有の農業は、繊細な食物網や土壌、そしてバクテリアや昆虫などの多種多様な生物が存在し、進化するための微妙な生物学的バランスを保った生態系を構築することに重点を置いていました。

伝統的な農業には栽培とエコロジーの同化が必要でした。それは食物を育成してきたある種の「生命の哲学」であり、共生関係でした。そのため、生態系を管理することは優先事項でした。豊かな生態系を持つこれらの作物品種の持続的な生物相互作用は、これらの作物品種が栄養分や病虫害抵抗性、薬効的な性質を向上させるためにゆっくり時間をかけて自然に進化することに役立っていると研究が示しています。生命の進化は隔離された状況では起きません。その周辺環境との持続的な生物相互作用や経験的知覚を通してのみ起きるのです。進化の初期段階の 1 つとして、植物が育った環境全体の特性を反映して進化できるように多様な現実を「認知させる」ことが重要です。

要するに、様々な自然や生きものの中に作物をさらし、周りに存在する生態系と接触させるという「生命の哲学」を農業自体が有しているということです。それによってそれら作物の各世代は進化することができます。多様性のある社会の中で人間が育つように、植物も同様の環境が必要だということです。

昔の人々が妨げてはならないと知っていた生態系との相互作用によって4万を超える種類の米が時間と共に進化してきました。研究開発も室内実験もされていません。ただ多種多様な生態系の中で育っただけです。

すべての生命体はある一定の経験的・知覚的知識を一生の間に蓄積し、それらを徐々に遺伝子構造に書き入れることによって何世代にも渡って進化していきます。それはミツバチでも人間でも、そして作物でも同じです。作物の周りから生物の多様性を排除することで作物は他のものと交わることができなくなり、何も無い場所にただ存在だけの経験的発達が不十分な生命体となってしまいます。これはやがて多種多様な自然環境の一部であることで可能となる生存のプロセスの崩壊をもたらすことでしょう。

貧困や世界規模の飢餓という問題があることは理解しています。しかし、農業への自然の摂理を超えた超自然的アプローチはいずれ失敗します。なぜなら、生態系から孤立し、進化の過程から切り離された状態で数世代が経過した作物はやがて存続できなくなるからです。農業と自然は同じ「生命の哲学」を包含しています。その原理は、刺激と生命の進化はお互いにかみ合っているということです。1つの生命体の行動はそれ自身とその周りの世界に計り知れない影響を及ぼします。そのため、自然界に対する理解を深めるためには保全だけでなく進化についても考える必要があるのです。

自然とデート

(原文はフランス語)

ジャーファル・チェリヒ (21 歳)

アルジェリア・ゲルマ市

コンスタンティン第 3 大学

ご存知の通り、技術はものすごい速さで発展を遂げています。一方で人間が自然を振り返ることはほとんどありません。このような状況ですが、私は自然の中で生活する人々の様子をおさめたドキュメンタリー番組を何度か見たことがありました。自然に親しんだことの無い私や私たち世代は、このような経験をすべきだと思いました。そこで私は自然を知るために自然とデートすることにしました。場所は祖父の家です。大自然に囲まれており、デートには最適な場所です。

祖母の死後、祖父は昔ながらのレンガ造りの家を出ることを拒み、子供たちとも同居せずに生活していました。そんな祖父の家に着き、今回の目的を話すととても喜んでくれました。それから 8 日分のプログラム、すなわち 1 か月の全週末分のプログラムを考えました。デートが始まると、その度に新しい何かを学び、毎回次のデートが待ち遠しくて仕方ありませんでした。自然の恵みを頂く時は、すべてを手作業で行います。道具は自然が与えてくれたものしか使いません。火は、夏であれば乾燥ハーブ、冬であれば乾燥させた動物のフンを使っておこします。食料を保存したければ、陶器の壺に食料を詰め、土に埋めなければなりません。横になり布団をかけて眠りたければ、動物の皮を加工し、毛で編み物をする必要があります。食べるためには、土を耕し、自然から良質なハーブを提供してもらい、タジン鍋などの自家製の陶器の道具で調理します。飲み物は水を自分で水源から運びます。チャクワというヤギの皮で作った道具を使うと、牛乳からバターやチーズを作ることができます。牛乳を入れたチャクワを振るとバターができるのです。病気の時に使う薬はハーブから作ります。祖父は私が今学んでいる薬学と同じようなレベルで、薬としてのハーブを熟知していました。

自然からは期待を大きく上回るものを学ぶことができました。これは、単なるデートとしてではなく、常に自分を生徒と捉えて自然に接した結果だと思います。自然は先生であり、

医師であり、ボディーガードでした。デートの後は毎回、違う自分になれた気がしました。几帳面さや粘り強さだけでなく、我慢強さや積極性までも培うことができました。以前の自分からは想像すらできません。デートを通して、人間の知識はすべて自然に由来しているということに気づかされました。自然という百科事典には、まだまだ開かれていないページがたくさん残っていて、開かれるのを心待ちにしているのです。

友達や近所の人、従妹達にこの経験を話しました。私が学んだことを彼らにも知ってもらいたかったのです。夏には友達と従妹と一緒に祖父の家に行き、森の入り口に「自然とデート」と大きな字で書かれた看板を立てました。看板に目をとめた人々に活動を始めた理由を話すと、ほとんどの人が、一刻も早く自然とのデートを楽しみたいと興味を持ってくれました。

全てのデートで人生が変わるわけではありませんが、自然とのデートであればその可能性はかなり高くなります。それまでの生活を捨て、全てを自然の中に移すことは簡単ではないでしょう。事実、私が目指していたのはそういうことではありません。私が目指していたのは、人々に自身の起源を発見してもらい、1日でもいいので自然から学んでもらうことです。一度体験してしまえば、次回のデートの申し込みは確実です。私は今薬学部に通っているので、祖父が使っていた天然の薬にはとても興味を持ちました。祖母が天然ハーブで不妊の女性を治療していたことも覚えています。治療を受けた女性たちは数か月後に赤ちゃんとともにお礼参りで再び祖母のもとを訪れていました。

はっきり言えることがあります。それは、未来は自然にあり、今日までの人類の発見は百科事典のほんの一部にしかすぎないということです。自然とのデートにお金はかかりません。恥ずかしがらずに今すぐデートに出かけ、自然の神秘を発見してきてください。

どっしりと山のように

(原文は英語)

ツェワン・ヌル・シェルパ (21 歳)

ネパール・カトマンズ市

ナミ大学

私はヒマラヤ山脈の窪地、シェルパ族が暮らす土地で生まれました。そこでは外で遊び、土床に絵を描いていると日々が過ぎて行きました。とても充実した日々でした。やわらかなそよ風で目を覚まし、一日かけて近くの山に出かけます。ちっぽけに見えた自分の村は、実は思っていたよりずっと大きいのだということを経験したものです。新たな発見を求めて、常に遠くの丘の反対側を目指しました。時に力強い川の流れに魅了され、時にはとてつもなく大きな円錐形の木に言葉を失うこともありました。将来については全く考えておらず、考えたことと言えば真っ青な空に舞上がり、自分達の目の前をさっと横切る鳥のように自由になりたいということぐらいでした。村で 2 年余りを過ごした後、私はついにネパールの首都カトマンズに足を踏み入れたのです。新たな生活が始まりました。

新しい学校では、廊下や食堂の隅にいつもぽつんと立っていました。不慣れた土地、見知らぬ人々、不自然な笑顔やぎこちない会話、自分の全てが影に覆れたようでした。自分の殻に閉じこもり、雄叫びを上げるシンバのように岩に仁王立ちした時の、晴れ晴れした気持ちを繰り返し思い出していたのです。切り倒された木、ジャングルから隔離された動物になったような気持ちでした。ヒマラヤ特有の顔立ちを理由にいじめも経験しました。いじめられる度に、動物園で笑いものにされる動物を思いました。夜には、暗い空を見つめ、ただただ夜空に浮かび上がる光模様に思いを巡らせました。

木は周囲の変化に敏感です。秋には緑の葉を赤に染め、冬には葉を落とします。これらの変化が起こる間、木は敏感な枝を広げたまま深く根を下ろし、どっしりと構えています。私は木を見習い、どんなことでも受け入れられる強い人間になって新しい人生を踏み出そうと決意しました。いじめられている間でも、故郷の山のように堂々として構えることにしたのです。そして、ヒマラヤ魂のおかげで、事なかれ主義をやめることにも成功しました。

自分が信じる宗教や、恵み豊かな故郷の山岳文化について語ることにしたのです。翼を広げ、大空に羽ばたく自由な鳥のように、大胆にも故郷の文化の全てを学校の課題で紹介したのです。すると、全てが川の流れるように順調に動き出しました。川の勢いに乗り、私の夢もどんどん大きくなりました。川が海に流れ出るところには、環境を守りたいという私の夢はますます現実味を帯びていきました。今、私は環境を守るというその夢を実現すべく、環境科学を学んでいます。

2015年のネパールの大地震で故郷は壊滅的な被害を受け、村は瓦礫の山へと変貌しました。私たちは、甚大な被害の真っ只中にいたとしても強い意志と強い心があれば逆境に立ち向かうことができることを学びました。今の自分の人生に感謝できるようになったのは、この地震が逆境をはねのけることの大切さを教えてくれたからです。自然災害は人間の生きる力に気づかせてくれます。この力を使って、川が高い場所から低い場所に流れるように、私たちは自分が得た学びを教育の機会に恵まれない人々に伝えていかねばなりません。

常に堤防に守られた川を進むのではなく、大きな夢を追いかけたいのであれば、自ら大海原に漕ぎ出し、自分の手で人生や夢を勝ち取らなければなりません。私がこれまでの人生で成し遂げた成功の全ては、自然の中で過ごした子供時代のおかげであり、ジェットコースターのようにスリリングな人生を送らせてもらっているのもそのおかげです。高すぎて登れない山はないように、困難すぎて克服できない試練もありません。だから私は太陽が昇り続ける限り、自然から学び続け、山のようにどっしり構えて生きていきます。

2017年度国際ユース作文コンテスト応募者の地域分布

地域名	子どもの部	若者の部	合 計	全応募数に占める割合 (%)
日本	2,583	1,832	4,415	28.6
アジア (日本以外)	1,212	4,212	5,424	35.1
大洋州	30	43	73	0.5
中東	56	100	156	1.0
ヨーロッパ	395	1,147	1,542	10.0
アフリカ	287	1,325	1,612	10.4
北米	108	222	330	2.1
中南米	267	1,622	1,889	12.2
合 計	4,938	10,503	15,441	100.0

